




## 論文審査結果の要旨

報告番号	甲 薬 第 216 号	氏 名	長尾 麻以
審査委員	主 査	土屋 浩一郎	
	副 査	滝口 真令	
	副 査	佐藤 陽一	

## 学位論文題目

非ステロイド性抗炎症薬服用による発癌抑制と炎症関連遺伝子多型の影響に関するメタアナリシス研究

## 審査結果の要旨

近年、非ステロイド性抗炎症薬(NSAIDs)が癌の発症リスクを下げることが示唆されており、癌に対する予防薬として、NSAIDs 臨床応用の可能性が高まっている。しかし、日本人における臨床研究はほとんど行われていない。また薬効に遺伝子多型が関与していることが明らかとなっており、薬剤感受性・発病予測のための医療の質の向上、遺伝情報に基づいた個別の治療法・治療薬の選択の必要性が提言されている。

本論文は、日本人男性における前立腺癌発症リスクと NSAIDs 服用歴との関係を調査することを目的に、徳島大学病院泌尿器科外来男性患者を対象に実施した調査研究と、炎症関連因子である、prostaglandin endoperoxide synthase (PTGS)、interleukin (IL)、peroxisome proliferator-activated receptor (PPAR)の遺伝子多型と NSAIDs 服用による発癌抑制効果との関係を評価することを目的にメタアナリシスを行ったものである。調査研究の結果、日本人男性において、NSAIDs が前立腺癌発症リスクを低下させる傾向があることを示した。また、メタアナリシスにより、結果が様々であった個々の臨床研究成果を統合することで、PTGS, IL, PPAR の遺伝子多型が NSAIDs 服用による発癌抑制効果に有意に影響を及ぼしていることを明らかにした。

以上の結果は、癌に対する予防薬として、NSAIDs を臨床応用する際、遺伝情報に基づいた個別化医療の必要性を示唆した重要な知見であり、博士論文に値すると認めた。